

化強の劇演民國

決戦下の演劇

關西國民演劇選奨委員 山本修一

この度の演劇に關する非常措置は演劇の全體に亘つて恐らくその死活を制するほどの重大な決定であつた

この非常措置は大約これを三つに分けて考へることが出来る。その第一は企業としての演劇、即ち商業劇場に關するものであるが、これによる最大の打撃が豫想されるものは、いふまでもなく歌舞伎劇である。歌舞伎劇はその根城であつた大劇場を逐はれ、名優の大一座は不可能となり、開演時間が二時間半以下といふのであるから、その座組において、演出藝題において根本的な再吟味が必要となつて來た。

非常措置の第二は興行内容に關するもので、將來の演劇は（一）日本精神の發揚に資するもの（二）簡素剛健で明朗潤達なもの（三）戦争遂行のための國民生活の新秩序建設を促進するものであらねばならないと同時に（四）戦時國民生活と遊離したものとか、華美輕佻もしくは不健全なものは排除されることに決定した。これは從來とても情報局が中心となり、優良演劇の推奨、脚本募集などの方法によつて、その建設が期待されてゐた「國民演劇」の理念を明確化し強力化したものといへるのである。

非常措置の第三は移動演劇の獎勵に關するものであるが、從來の日本移動演劇聯盟が擔當してゐた仕事、即ち演劇に惠まれる機會の少い農村や工場地帶への演劇の配給といふ仕事を情報局自身が擔當し、その需給調整機關を局内に設置するといふのである。

それから從來移動演劇に要する費用は、その配給を受けた主催者側が劇團の宿泊費、食事費を負擔すると共に二百圓餘りの上演費を支拂ひ、聯盟側は移動費を負擔し、劇團側は人件費その他の舞台費用を負擔するといふ三本立てであつたのを、今後は劇團側には一切の費用を負担させないこと定めたのである。

常分 創劇團置配置

演劇に關する非常措置を通觀して何より最初に氣づくことは、演劇の社會における生存價値の變轉である。演劇はいふまでもなく一個の藝術としての存在を十分主張し得るものであるが、これを根本義とする新劇團や小劇場の勢力は甚だ微弱なものであつて、そののつびきならぬ存在を強く認識させて來たものは企業形態としての演劇であつた。利潤を對象とする演劇は膨大な資本を擁し、この資本が演劇の社會的地位を扶植して來たといへるのである。

しかるにこの度の非常措置によつて、營利事業としての演劇が將來存立し得るとしても、少くとも甚だしい抑制を

受けるといふことになつて來れば、演劇は自己の存在理由を新たなる方向に發見しならなくなつた。藝術としての演劇を標榜することも、藝術それ自體の生存價値が

再吟味を受けなければならぬ切迫した情勢を考へると生温かいといふ外なく、一にそれが持つ國家的意義、並に國民大衆に及ぼす機能の面からの検討を必要とするに至つた

かゝる見地に立つ時に、何人の眼にも色濃く浮び上るのは移動演劇の姿であり、次官會議の決定にも「演劇の普遍化」が叫ばれてゐる。

しかしながら演劇の普遍化といふことと移動演劇といふことは必ずしも同意語でなく、移動劇團の數を如何に増加するとしても市制を布いてゐる二百に餘る地方都市だけでも巡回するのが精一杯であらう。况んや無數の農村や工場の需要を満たし得ないのは論をまたない。

筆者の提唱したいのは、むしろ各府縣、或はそのプロツクを單位とする常置劇團の設立である。この常置劇團は、それ

の地方文化と緊密に提携すると共に、一方中央から派遣される優秀な技術者の指導を受け、時にはそれと共に演ずる。この劇團の根城とする一つの劇場を中心として、そこからそれ／＼の地方における工場、農村を訪れるにすれば、徒然な交通禍、輸送禍から免れ得るのみならず、こゝに健全著實な想家は夙に慟死せしならん。

「演劇の普遍化」が達成されるであらうと思ふ(第三高校教授)

瓊玉の光輝

彌生壽月

第三回帝國藝術院賞授與者は昭和十九年三月四日の總會に於て日本因協會々長にして文樂座櫓下二代目豊竹古馴大夫と決定せる旨文部大臣より發表されたり。蓋し我淨瑠璃界空前の恩賞最慶事! 受賞規則第一條に該當せるものにして其の卓越せる藝能は現代最高絶無の尊嚴と云ふべし、所謂「一道萬藝に通ず」忍苦精進の結晶、万藝中至難の淨瑠璃が藝道最高峰に放つ光彩は日本肇國精神、皇民魂の輝きなること大東亞新秩序建設戦下に認識せられたるものにして無限の慶祝を表す。我が金杉古馴師は斯道の爲君國の爲、若い人達を率ゐ研究鍛錬多くの後繼を送り爾々益々この恩賞を輝かしめさるべからず、是れ則はち元祖に應ふる道にして同時に君國に捧ぐる最大の御奉公なり。これが爲には本誌は如何なる犠牲も甘じてこれに殉ぜん事を誓ふ。

瓊玉は隱るゝとも其の光輝は蔽ふへからず、古馴藝術は斯の如く徹底せり、恐らく本誌の此の主張に反対して不買同盟を起こしたる日本淨瑠璃界に潜伏せる米英崇拜の敵性危險思想家は夙に慟死せしならん。

▲朝に道を聞けば夕に死すとも可なり▼(孔子)